

鈴木正男先生の定年退職にあたって

鈴木正男先生は2007年3月に定年を迎えられ、立教大学社会学部を退職されました。先生は1974年4月に立教大学一般教育部に助教授として着任され、1987年4月に教授に昇格され、その後、1995年4月からは本学理学部総合講座に、そして、1997年4月からは理学部化学科および大学院理学研究科博士課程前後期課程に所属されました。鈴木先生と社会学部との関係は、2004年度に現代文化学科に参加していただくことから始まりました。定年までわずか3年間でしたが、先生は幅広いご経験と研究業績を踏まえた教育指導により現代文化学科、そして、社会学部のために尽力されました。立教大学全体では在職32年間でした。

鈴木先生は黒曜石の研究で数多くの論文を発表され、この分野の第一人者として国内外で高く評価されており。また、1990年代からはイースター島をフィールドに7度におよぶ現地調査を実施し、1996年にはイースター島に関する国際会議で基調講演をされています。イースター島の研究に環境問題の観点も含めた独創的な研究を発表されています。地質学、人類学、考古学などの学問領域を横断する先生の研究展開は、自然科学の研究に人間や社会環境の視座を導入されたものであり、先生は自然科学と社会科学に関わる独自の研究領域を開拓されてきました。こうした鈴木先生のご研究は社会学部、なかんずく環境を主要な科目領域のひとつとする現代文化学科との関わりを有するものであり、同学科の専門科目「環境と人類」に代表されるように、短い期間ではありましたが大変貴重な貢献をしていただきました。

言うまでもなく、鈴木先生の教育面の貢献は社会学部の専門教育に限られるものではなく、全学共通カリキュラム、そして、理学部大学院における研究指導を含む、幅広いものでありました。

こうした研究や教育面に加え、先生は立教大学の運営にも貢献され、いくつもの重責を歴任されました。1991年4月から1993年3月まで当時の一般教育部の部長として、現在の全カリにつながる改革の道筋をつけるべくご尽力されました。同時期に先生は立教学院の評議員として、学院全体の運営にも関与されました。一般教育部長の任期終了後は、引き続き本学の国際センター長として1993年度から1998年度まで本学の国際化に向けてリーダーシップを発揮されました。また、1999年度には本学原子力研究所長兼原子炉施設統括本部長に就任され、本学にとって長年の困難な課題であった原子炉の廃炉に向けた一連の作業にとりくまれました。この点は特筆されるべきであると考えます。

廃炉まではいくつもの段階と長い年月を要し、現在でもまだ完了しておりません。鈴木先生は定年退職後も引きつづき調査役に任命され、この問題に取り組まれております。

こうした状況では定年の解放感を味わうのはまだしばらく先になるでしょうが、先生が健康に恵まれ、ますますご活躍されることを祈ってやみません。

2008年3月

社会学部長

木 下 康 仁